

「仁と為す」か「仁を為す」か

——朱熹『論語集注』のもとでの
『論語』顔淵篇「克己復礼為仁」の訓読——

林文孝 HAYASHI Fumitaka

はじめに

聖典的テキストのある1句のわずか2文字の解釈が確定しがたい。それも、競合する諸解釈どうしの間ならまだしも、ある特定の解釈枠組みに従っているはずの場面において、そうした現象を取り上げ、一定の解を示そうとするのが、本稿の試みである。

具体的には、『論語』顔淵篇第1章の有名なフレーズにかかわることである。孔子の弟子として最優秀と目された顔淵が、孔子の教えで最高の徳目である仁について質問する。それに対する孔子の答えは、当然、仁の本質に最も肉薄したものと期待される。その文脈の重要さゆえに、古来解釈者たちから重視されてきた章といえる。その経文(本文)について、本稿が問題とする2文字を含む前半部分を、まず原文で掲げよう(ただし、用字は常用漢字による)。当該の句には下線を施す。

顔淵問仁。子曰、「克己復礼為仁。一日克己復礼，天下帰仁焉。為仁由己，而由人乎哉。」(朱熹『論語集注』卷6：朱 [12C末] 1983: 131)

以下、顔淵がその細目を問い、非礼についての視聽言動を戒める孔子の言葉が引き出されることになる。

この中でも下線を付した「克己復礼為仁」こそ、「仁」の内容を示した核心部分と見なされるがゆえに、その解釈には解釈者の思想の重心が懸けられることとなる。朱熹(1130-1200)の『論語集注』が「克」を「勝」、「己」を「身之私欲」と解したことはその典型であり、朱熹の「存天理滅人欲」の思想の根拠の1つが、ここに見出

されていることになろう。そして、朱子学の欲望抑圧的態度を批判する後世の思想家は、この解釈の正当性をめぐって論陣を張ることともなる²。ともあれ、朱熹の注によって解釈する限り、「克己復礼」とは、もし漢文訓読するなら「己に克ち礼に復る」と表現されるべき内容であることが明らかであった³。

いっぽう、その4字に後続する「為仁」の2字をめぐっては、思想上さほど重点的に論じられることはなかったけれども、解釈の可能性としてはおおむね2つある。訓読の上では「仁と為す」と読まれる場合と「仁を為す」と読まれる場合とである。前者であれば「克己復礼」が「仁である」のに対し、後者であれば「克己復礼」を通じて「仁を実践する」ことになる。完全に背反するとまではいえないが、意味の違いは小さくない。それだけでなく、「克己復礼」を「仁」とどのように関係づけるかという重大なポイントがそこには含まれているはずである。ところが、朱熹の『論語集注』に従っているはずの解釈者たちの間では、朱熹自身この2字についても注釈していると考えられるにもかかわらず、実際には前記の2とおりの解釈が行われている現状がある。これはいったいどうしたことか。

この場合、依拠すべきは朱熹の『集注』なのであるから、問題はその注文をいかに解釈するかに帰着する。さきに挙げた経文に対応する朱熹の『集注』（程子と謝氏の引用部分を除く）を、まずは原文で引いておこう。「為仁」の2字に直接かかわるであろう部分に下線を施す。また、その意味を確定するために資するはずの、敷衍的説明部分を波線で示す。

仁者、本心之全徳。克、勝也。己、謂身之私欲也。復、反也。礼者、天理之節文也。為仁者、所以全其心之徳也。蓋心之全徳、莫非天理、而亦不能不壞於人欲。故為仁者必有以勝私欲而復於礼、則事皆天理、而本心之徳復全於我矣。 歸、猶与也。又言一日克己復礼、則天下之人皆与其仁、極言其効之甚速而至大也。又言為仁由己而非他人所能預、又見其機之在我而無難也。日日克之、不以為難、則私欲浄尽、天理流行、而仁不可勝用矣。
(朱熹『論語集注』卷6：朱 [12C末] 1983: 131-2)

本稿では、日本の漢文訓読方式あるいは現代日本語訳で釈読され

た『論語集注』に主に関心を集中し、その解釈の状況をまず整理する。先取りしていえば、朱熹の注は多くの場合「仁を為す」と読まれているにもかかわらず、経文に対しては多くが「仁と為す」と解し、「仁を為す」という解釈は希少例である。しかし、前掲の『集注』の一節を分析する限り、経文を朱熹は「仁を為す」の方向で解釈していたはずであるので、そのことを確認したい。ところが、一部の解釈者は明白に異なる主張をもって「仁と為す」という経文解釈を行っていると考えられるため、次にそれらの根拠を検討する。1つには、朱熹自身の言説の中に、当該経文を「仁と為す」の意味に読んでいた証拠が見出されること。もう1つには、朱熹の注が「仁を為す」と読まれるべきであるとすれば、この注が実は後文の「為仁由己」の「為仁」に対応するものだとする説明。私はこれら2つの解釈をいずれも成立し得ないと考える。また、「仁と為す」と「仁を為す」のいずれにも与しない第3の読みも主張されているが、それも難点が大きいことを指摘したい。以上の主張と論証が本文の眼目だが、付随する問題について、「おわりに」において展望しておく。

1. 近現代日本における諸解釈の状況

かつて『論語集注』が果たした教育的役割の大きさからすれば意外なことだが、現代日本において、『論語』を一貫して『集注』により解釈する書物は多くない。そして、『集注』そのものの解釈をも明示してくれる文献は、いっそう少ない。とはいえ、いくつかは存在しており、それらを調べる過程で生じた疑問が本稿の出発点となっている。

まず、最新の重要な成果である土田健次郎訳注『論語集注』（土田訳注 2013, 2014a, 2014b, 2015）から出発しよう。そして、その「訳注者まえがき」が紹介する先行業績（土田訳注 2013: 13）に、管見に触れた訳注書、および『論語』の当該章を主題とする研究文献から若干の補足を加えつつ、近現代の範囲で年代を遡りながら列挙する。資料の質はばらつくが、『集注』の解釈あるいは『集注』による解釈を旨とする点では共通であり、その傾向性を窺うには足り

るであろう。「はじめに」で引用した顔淵篇第1章の経文と『集注』本文について、下線付で示した部分をそれぞれがどう訓読あるいは翻訳しているかを示し、明示されていない場合は波線部への解説等から推測する。

(1) 土田健次郎：『集注』翻訳

〈経文訓読〉己に克ちて礼に復すを仁と為す。(土田訳注 2014b: 297)

〈集注訓読〉仁を為すとは、其の心の徳を全くする所以なり。(土田訳注 2014b: 299)

(2) 佐藤鍊太郎監訳：『朱子語類』の当該章関係箇所^{かへ}の訳注

〈経文訓読〉己に克ち礼に復るを仁と為す。(佐藤監訳 2013: 145, ルビ原文)

〈経文現代日本語訳〉自分の私欲に打ち勝ち、(天理の現れである)礼に反るのが、仁(本来の心の徳を全うすること)だ。(佐藤監訳 2013: 145) → 『集注』の読み方は不明だが、「仁」の語釈として『集注』の「為仁」についての注が取り入れられていることからすると、「仁と為す」と読んでいる可能性が高い。

(3) 吹野安・石本道明：『孔子全書』での『集注』引用

〈経文訓読〉己に克ちて礼を復^{おのれ}む^かを仁^{かへ}と為^{じん}す。(吹野・石本 2001: 83, ルビ原文)

〈集注訓読〉仁を為すとは、其の心の徳を全くする所以なり。(吹野・石本 2001: 84)

『集注』が「復、反也」と注するにもかかわらず、朱熹・新注系文献の「復」字を一貫して「ふむ」と訓読するのが本書の特徴である。

(4) 木南卓一：『集注』詳解

〈経文訓読〉己に克ち礼に復り仁を為す。(木南 2001: 572)

〈集注訓読〉仁を為すは其の心の徳を全うする所以なり。(木南 2001: 572)

浅見綱斎の講義を若林強斎が筆録した『論語師説』を重視し、これらの訓読もそれに従う。

(5) 松川健二：「克己復礼」解釈史研究

〈経文訓読の提示〉……以上二則を総合すれば、朱熹の真意は、己に克ち礼に復りて仁と為る、と訓ずべきところに在ることが判る

のである。(松川 2000: 151)

〈集注訓読〉仁と為るとは、その心の徳を全うする所以なり。(松川 2000: 153) →波線部の「為仁者」も「仁と為るもの」と読む。

(6) 吉田公平：『集注』による『論語』訳

〈経文訓読〉己に克ち礼に復るを仁と為す。(吉田 2000: 239, ルビ原文)

〈集注波線部を反映した解説〉しかし、その「己れ」が本来は完全に善であるからこそ自力で実践できるのだが、現実の「己れ」は私欲におおわれているので、それにうちかかって、本来の仁を回復しなければならないという。(吉田 2000: 241) →当該部分の解釈は不明だが、波線部を仁の「実践」にかかわる問題として捉えているので、「仁を為す」と解している可能性が高い。

(7) 小島毅：『朱子語類』の当該章関係箇所訳注

〈集注訓読〉仁と為すとは、その心の徳を全うする所以なり。(小島 1994: 2)

経文は原文のまま掲げられているが、上記より「仁と為す」と読むことは明らかである。

(8) 小澤正明：『集注』翻訳

〈経文現代日本語訳〉己れに克ち礼に復るのを仁と為すものである。(小澤 [1988] 1989: 224, ルビ原文)

〈集注現代日本語訳〉仁を為すとは、其の心の徳を全うする所以のものである。(小澤 1989: 224, ルビ原文)

(9) 宇野哲人 (I)：『集注』による『論語』通釈

〈経文訓読〉己におのれに克ち礼に復るを仁と為す。(宇野 [1929] 1980: 335, ルビ原文)

〈集注を反映した通釈〉故に己の私欲に打ち勝って礼に反るのが仁を行う方法である。(宇野 [1929] 1980: 336, ルビ原文) →波線部を反映。そこから遡って、『集注』当該部分は「仁を為す」と読んだと推測される。

(10) 『朱子学大系』：『集注』翻訳

〈経文訓読：原文は訓点添え仮名〉己に克ち礼に復るを仁と為す。(鈴木ほか 1974: 215)

〈集注現代日本語訳〉仁をなすのは、その心の徳を全くするゆゑんである。(鈴木ほか 1974: 215)

(11) 佐野公治：「克己復礼」解釈史研究

〈集注訓読〉為仁トハ其ノ心ノ徳ヲ全ウスル所以ナリ。蓋シ心之全徳ハ、天理ニ非ザル莫シ。而レドモ亦人欲ニ壞ラレザル能ハズ。故ニ仁ヲ為ス者ハ、必ズ私欲ニ勝チテ私ニ復ヘルアレバ、則チ事皆天理ニシテ、本心ノ徳復ヘリテ我ニ全シ。(佐野 1971: 47, ルビ原文) →当該部分の肝心の2字は読み下されていないので、波線部まで引いた。「仁ヲ為ス」と読むようである。しかし、これによる経文の読みは明示されない。

(12) 倉石武四郎：『集注』による『論語』翻訳

〈経文現代日本語訳〉自分に打ち勝って礼レイに戻るのが仁ジンです。(倉石訳 1970: 489, ルビ原文, 小字注は省略) →倉石は訓読否定論者だが、あえて訓読に直せば「仁と為す」である。

〈上文のあとに小字注として補入された集注による解説〉心にそなわった完全な徳トクといえば自然の道理にほかならない、が、それも人慾のために破られてしまう、だから心の徳トクを完全にしようとして仁ジンを行なうためには、私慾に打ち勝って礼レイに戻るほかはない。(倉石訳 1970: 489, ルビ原文) →「仁を行なう」という表現から、『集注』については「仁を為す」と解すると判断される。

(13) 宇野哲人 (II)：『集注』訓読訳

〈経文訓読：原文は訓点添え仮名〉己に克ちて礼に復るを仁と為す。(宇野訳 1920: 219)

〈集注訓読〉仁を為すとは、其の心の徳を全うする所以なり。(宇野訳 1920: 219)

(14) 矢野恒太：『集注』による『ポケット論語』

以下、上欄外の「読方及大意」による。本文は『論語集注』なのに対し、こちらは「必しも朱註に従はず」(矢野編 1907: 1) とあるが、ここは『集注』を踏まえると思われる。

〈経文訓読〉己ニ克チ礼ニ復ルヲ仁ト為ス (矢野編 1907: 176)

〈大意解説〉人間私慾なき能はず、私欲生ずれば心礼を離る、己にして私慾を制マすれば心礼に復るなり、心礼を離れざれば行必仁なり、故に仁を為すと否は自己に在りて人に在らず能く一日仁を為すものあらば天下之に帰せん (矢野編 1907: 176) →『集注』当該箇所をどう読んだか厳密には不明だが、「行必仁なり」とは、仁の実践に重心があろう。

(15) 中村惕斎 (1629-1703) : 『集注』による解説

江戸時代にも有力な訓点家の1人であったが、近代以降、『先哲遺著 漢籍国字解全書』に収録されて広く読まれた。土田健次郎が高く評価する(土田訳注 2015: 482)。

〈経文訓読：原文は訓点添え仮名〉己に克^かつて礼にかへ^{かへ}るを仁と為^す、
(中村 [1701叙] 1910: 217)

〈解説〉これ仁をする者必よく己の私欲に克て、礼にかへる時は、則其行ふことみな、理にかなひて、本心の徳、天然のまゝに、我に全し、これ即仁になりたる時なるによりて、仁とすと云なり、蓋しはじめより、礼にかへらんがために、己に克つ、よく己に克つ時は、即礼にかへる、二段の工夫にあらず、すでに礼にかへる時は、即仁にして、亦一時のとなり、然れども、本文の正意は、たゞすでに克己復礼^{コクキフク}して、仁になりたる者を云なり、(中村 [1701叙] 1910: 217, ルビ原文) → 『集注』にもとづく敷衍説明。

以上の15例に見られる状況を、「仁を為す」と読むか「仁と為す」という1字の助詞の組み合わせパターンを基本として分類整理すると、次のようになる⁴。

- 経文「を」＋集注「を」：(4)。
- 経文「と」＋集注「を」：(1), (3), (8), (9), (10), (13)。
他に、この類型と推測されるのが、(6), (12), (14)。
- 経文「と」＋集注「と」：(7), (15)。
他に (2) もこの類型か。
- 経文・集注とも「仁と為る」：(5)。

その他、確証に欠けるが、(11) は少なくとも集注については「を」と読むと推測される。

これにより、経文「と」＋集注「を」が、推測分を除外しても大多数を占めている状況がわかる。しかも、宇野哲人や『朱子学大系』執筆陣、そして近年の土田健次郎といった、日本の中国哲学研究をリードしてきた錚々たる顔ぶれがこの読みを採る。

しかし、これは奇妙なことではないのか。経文に対しての注文なのだから、両者の読みは一致すべきはずなのだが、その点を丁寧に説明した上でこの読みを採る解釈はまれである。原則として、集注の読みが確定すれば、それが経文の読みにも当てはまるはずだ。次節では、『集注』本文の解析をつうじて第1の読みが正しいであろう

ことを確認する。

2. 経文・集注とも「仁を為す」と読むべきこと

『集注』の当該箇所を分析する。そのために、土田健次郎の現代日本語訳の助けを借りよう。最初に引いた原文に対応させて、2種類の下線を施す。

「仁を為す」とは心に具わる徳の全体を実現する手だてである。 心に具わる徳の総体は、天理そのものである。 しかしまた人欲によって破られないではすむことは無い。 それゆえ仁を實踐する者は、それによって私欲に勝って礼に復帰できれば、その人の営為は全て天理に則り、本来の心の徳は、もとおりに自分に完備する。 (土田訳注 2014b: 297-8)

この訳には間然する所がない。他の『集注』現代日本語訳が漢文訓読の置き換え程度にとどまるのに比し、古典中国語と現代日本語の双方の論理を深く掘り下げた翻訳といえる。

これで見る限り、下線部で「為仁」を「仁を為す」と読んでいることは完全に正しい。波線下線部冒頭の「為仁者」を「仁を實踐する者」と訳しているのは、より直截明瞭である。その正しさは、『集注』自体の注釈構成を忠実に反映していることに由来する。『集注』では最初に「顔淵問仁」の「仁」が解釈された。すなわち、「仁者、本心之全徳」、土田訳では「『仁』とは本来の心に具わる徳の総体」(土田訳注 2014b: 297)。これに対して、「為仁」の注では「所以全其心之徳」とある。こちらは「本心」という表現が消えており、「全」は「徳」の形容ではなく、「徳」の「全体を実現する」という動詞に転じている。この落差を説明するものとして、波線部における敷衍説明の内容を反映させることができる。すなわち、本来の心の徳の総体としての「仁」は、通常は人欲・私欲によって破られた非本来的状態にあるため、その私欲に勝って礼に復帰するという実践を通じてはじめて本来の心の徳の総体を実現できる。「克己復礼」とは、本来的な「仁」を実現するための手だてであり、非本来性が

ら本来性を回復する動作・行為として「為仁」が表現されていることになる。「克己復礼」により「仁を為す」のである。

『集注』については多数の解釈者が「仁を為す」と解していたことを想起しよう。それは、朱熹の注釈構成がそれ以外の解釈の余地をほとんど残していないことによる⁵。したがって、『集注』について「仁と為す」とする解釈は、この時点で誤りといってよい。実際、当該注文の後半を「仁」の注との関係から言い換えるとすると、「仁と為す」と解釈された場合の注文の内容は、「仁であるとは、仁を実現するための手だてである」という意味不明文と化し、注釈としての用をなさないのである⁶。

だとすれば、この解釈のもとでは経文の「為仁」も「仁を為す」と読むべきはずである。(4)の木南卓一ならびに彼が参照する山崎闇齋学派の読みはその意味で正しい⁷。しかるに、土田も他の多くの解釈者も、経文の読みには「仁と為す」を採っていた。そこには多分に慣習的な力の作用が想像されるのだが、一方で、『集注』のもとでも経文を「仁と為す」と読むよう方向付ける資料も存在し、一定の検討を必要とする。清代に汪份が増訂した『四書大全』を手がかりとすれば、「為仁者」の注文に対する小字双行注として「附」が3条あり、いずれも「仁と為す」という読みを主張する。2条は『朱子語類』での朱熹の発言、1条は南宋末の学者・黄震の『黄氏日抄』の一節である(『論語集註大全』巻12:汪増訂・吉村点[1853跋]1993:1181-2)。これらを順次検討していこう。

3. 「仁と為す」を支持する朱熹の言説の検討

黎靖徳編『朱子語類』140巻は、朱熹門人たちの記録による各種朱子語録をもとに分類編集したものであり、朱熹自身の肉声に最も近い言葉が読み取れる資料といえる。したがって、朱熹の思想を詳細に跡づけようとする人は、必ずこれを参照してきた。

本書の中に、『論語』顔淵篇の当該文言を「仁と為す」の方向で解釈する言葉が2条ある。

「克己復礼為仁」, 与「可以为仁矣」之「為」, 如「謂之」相

似. 与「孝弟為仁之本」, 「為仁由己」之「為」不同. [節.]

「克己復礼為仁」と「可以為仁矣（以て仁と為すべし）」（『論語』憲問）の「為」は、「謂之（それを～と称する）」という語法に類似している。「孝弟為仁之本（孝弟は仁を為すの本）」（『論語』学而）や「為仁由己（仁を為すは己に由る）」（『論語』顔淵）の「為」とは違う。[甘節の記録.]（『朱子語類』卷41第10条：黎編 [1270] 1986: 1043, 日本語訳林, 小島毅にも訳注あり [小島 1994: 5]）

「人之為道而遠人」, 如「為仁由己」之「為」, 「不可以為道」, 如「克己復礼為仁」之「為」. [閔祖.]

「人之為道而遠人（人の道を為して人に遠き）」（『中庸』第13章）は「為仁由己」の「為」と同様で, 「不可以為道（以て道と為すべからず）」（同上）は「克己復礼為仁」の「為」と同様だ. [李閔祖の記録.]（『朱子語類』卷63第94条：黎編 [1270] 1986: 1541, 日本語訳林）

「為仁」を「仁と為す」と解するのか, 「仁を為す」と解するのか. 「克己復礼為仁」はどちらの条でも「仁と為す」の代表例とされ, 顔淵篇の同じ章に出る「為仁由己」が「仁を為す」の代表例であるのと対比される. これらだけに着目すれば, 朱熹は当該文言を「仁と為す」と読んだことになり, 経文をも集注をもその読みで統一しようとする動機も萌しうる. 少なくとも, 経文については「仁と為す」と読むのが朱熹の真意であったかに見える.

実をいえば, 経文自体の解釈としてより自然なのは「仁と為す」であろう. これらの条で朱熹がいうとおり, 「謂之」に近い注釈用語的な用法として, 「である」を意味する「為」は珍しくない. ここは顔淵が「仁」を問うたのであるから, 「～が仁である」「～のことを仁という」といった答えの方がむしろ期待される. しかも, 『春秋左氏伝』昭公12年には, 孔子の言葉として「克己復礼, 仁也」とある. このことは, 経文を「仁と為す」と読む解釈者が多いことの一因となっているだろう.

しかし, ここでの焦点はあくまでも, 朱熹の『集注』自体がどのような読みを指示しているか, である. 現在の『集注』の文言は「仁を為す」の方向で読まざるを得ないのは前節に見たとおりであ

るから、前掲の朱熹の言説はその観点から軽重を量る必要がある。

その際、考慮に入れるべきことが2点ある。第1は、『集注』という著作に朱熹が注いだ精力の大きさである。いわゆる『四書集注』のうち『大学章句』と『中庸章句』には淳熙16年(1189)の自序があるが、この時点で『集注』が完成したわけではない。それ以後も、朱熹が没する1200年までの間孜々として『集注』の改訂作業が続けられたことは周知の事実である。そのように推敲を重ねて安定を得たはずの『集注』の文言に対して、門人による一時の発言記録ほどの程度解釈を規定しうるのは、慎重に検討すべきであろう。

第2の点は、『朱子語類』にも一方には「仁を為す」と読む方向での発言が数条存在するという点である。このことは、山崎闇齋『文会筆録』巻4の3に指摘され、なおかつ前掲2条については「朱註と合わない」ことが注記される(日本古典学会編1978:224-5)。この考え方が、木南卓一の紹介する浅見綱齋に引き継がれるわけである(木南2001:578)。

ここで、以下の前提を導入しておきたい。すなわち、朱熹の発言は早年のものであればあるほど、現行『集注』とは齟齬しやすい、というものである。最晩年の定論として『集注』を想定するならば、それ以前の朱熹は違う考え方を抱いていても不思議ではない。すべての朱熹の言説を一貫した思想の産物とみなそうとするのは無理があるし、ある発言に基づいて一方の解釈を規定しようとするのは、時に大きく誤りうる。

『朱子語類』に収める記録のうち、いくつかについては年代の特定が可能である。前掲の2番目の記録者、李閔祖の記録については、『語類』の材料の1つであり近年整理・出版された李道伝編『朱子語録』に収録されており、前掲発言も存在する(巻5第21条:李編[1215]2016:124)。そして、その発言は「戊申所聞」(李編[1215]2016:121)すなわち1188年のものとしてまとめられた中に位置する。

最初の甘節の記録については、これほど特定できる材料は現在ない。しかし、田中謙二の詳細な研究により、各記録者の朱門師事期はかなり判明しており、甘節については1193～1194年の第1次師事期に加え、1196年ごろの第2次師事期の存在が想定されている(田中2001:112-115)。だいぶ朱熹晩年に近い。

これらに対して、「仁を為す」と解釈する方向での発言を1条だけ

引こう。

問、「[克己復礼為仁]、這「為」字、便与子路「為仁」之「為」字同否。」曰、「然。」又問、「程先生云、「須是克己私、皆歸於礼、方始是仁。」恐「是仁」字与「為仁」字意不相似。」曰、「克去那箇、便是這箇。蓋克去己私、便是天理、「克己復礼」所以為仁也。仁是地頭、「克己復礼」是工夫、所以到那地頭底。」…… [熹.]

質問、「[克己復礼為仁]の「為」という字は、子路が「仁を為す」⁸というときの「為」という字と同じなのでしょうか。」答「そうだ。」また質問、「程先生は「己私に克ち尽くし、全面的に礼に立ち戻ってこそ仁である」と云われていますが、「仁である」という表現と「仁を為す」という表現とは意味がだいぶ違うのではないかと思うのですが。」答、「あれに克ったならばこれなのだ。つまり、己私に克ったならば、それが天理なのだ。「克己復礼」とは仁を為す手だてである。仁は境地であり、「克己復礼」は修行であって、あの境地に到るための手だてなのだ。」…… [呂熹の記録。] (『朱子語類』卷41第61条：黎編 [1270] 1986: 1058, 日本語訳林, 北海道大学のグループによる訳注あり [佐藤監訳 2013: 190-2])

質問者の言及する「程先生」の語は、『集注』既引箇所にかけて引用される程子の語。この条では朱熹は、当該経文を「仁を為す」とする解釈を肯定している。だがそうすると、『集注』に引証される程子の語で「仁である」と表現しているのと齟齬を生じるのではないか。これが2番目の質問の主意である。それに対する朱熹の答えは、齟齬はない、ということに帰する。なぜそうであり得るのかといえ、仁を本来的境地としてそこへの回帰を志向する思想構造が前提条件として指摘できよう。さしあたり重要なのは、本条の記録者・呂熹の師事期が朱熹最晩年の1199年であり(田中 2001: 289)、しかも『集注』の現行本文の構成を前提とした問答となっていることだ。

以上のことから、次のようにいえよう。『朱子語類』中に「仁と為す」という解釈を支持する朱熹の発言が2条存在するとはいえ、

その資料価値を過大に見積もることはできず、それらよりも後年に記録された「仁を為す」と解釈する発言の側に、より『集注』の真意に近い可能性を認めうる。

4. 『集注』の「仁を為す」を経文から引き離す見解

汪份増訂『四書大全』が附録するもう1種類の資料は、南宋末の朱子学者・黄震（1213-1280）の劄記体の著作『黄氏日抄』の一節である。『集注』で下線を引いた当該注文へのコメントである。

愚按、此章前曰「克己復礼為仁」、後曰「為仁由己」、此註恐指「為仁由己」之「為仁」耳。蓋以語脈而詳之、「克己復礼為仁」、云克己復礼即所為仁、「為」非用力之字。若「為仁由己」、則「為」乃用力之字。語雖相似、而脈則不同也。要之為仁之工夫、即是上文克己復理、盍更詳之。

鄙見では、この章では前に「克己復礼為仁」といい、後に「為仁由己」といっていて、この注はおそらく「為仁由己」の「為仁」を指示したものにちがいない。というのも、言葉の続き具合から細かく見ていけば、「克己復礼為仁」とは、克己復礼がずばり仁というものであることを言っており、「為」は力を用いる（対象に作用を加える）概念ではない。「為仁由己」の場合だと、「為」はそれこそ力を用いる概念であり、言葉としては似ていても、続き具合が違うのである。要するに、仁を為す修行とは、上文に言う「克己復理」にほかならない。いっそう細かく読み取ってほしいものである。（黄震『黄氏日抄』巻2：黄[1768刊] 1984: 19, 日本語訳林）

要するに、当該の「為仁者」の注は、経文の中で後に見える「為仁由己」の「為仁」に対する注だというのだ。そちらが「仁を為す」と読まれるべきことは明瞭である。これに対して、「克己復礼為仁」については「仁と為す」としか読めないと判断される一方、朱熹の注は「仁を為す」ことについての注としか理解できないことから、「脈（続き具合）」の詳細な検討をもとに上記の判断が示される。

この解釈はとうてい成り立たない。「脈」を言うならば、現行『集注』の本文は経文との間で緊密な連携を保って配置されており、下文への注であるべきものがそれ以前に配置されていることなど、ほとんどあり得ないのである。

具体的にいえば、最初に掲出した経文は、下線部までを1区切りに、さらにピリオドで表示した区切りにより計3つに分段され、『集注』では各段ごとに語注と敷衍的説明がなされてのち、その節全体にかかわる程子と謝氏の見解が引証されるという構成である。第1段からは、「仁」、「克」、「己」、「復」、「礼」と経文に出る順序通り語注が進み、その後、「為仁者」という当該注文が現れる。つづく波線部は第1段全体の内容解説である。それが終われば、「帰」への語注と、「又言」として第2段の敷衍説明。第3段についてはもう語注はないので、ただちにまた「又言」として内容解説に移る。

この配置から見ても、下線を付した注文が「克己復礼為仁」の「為仁」に対する内容説明の語注であることは間違いない。そのことは、波線部の内容において「仁を為す」ことにかかわる説明が展開されていることから確かめられる。黄震が指摘する下文との関係においては、上文も下文も一貫して「仁を為す」と読むからこそ、朱熹は第1段の注でその内容を明示しておいたのだといえる⁹。

かくして、黄震の見解を支えているのは、「克己復礼為仁」の「為仁」は「仁と為す」としか読めないという先入見に過ぎないことは明らかである¹⁰。

5. 「仁と為る」という読み

以上を通じて、「仁と為す」か「仁を為す」かの枠組みで考える限り、経文・集注とも「仁を為す」という方向で理解するのが朱熹の見解であったといえる。しかし、この枠組みに乗らず、第1節で列挙した中で唯一「仁と為る」という読みを提示したのが、(5)の松川健二である。その成立可能性についても検討しておく必要がある。

第1節で提示した資料に「以上二則を総合すれば」とあった。これは、『朱子語類』の関連記述を指しており、具体的には、本稿第

3節に引いた甘節の記録と呂熹の記録である。松川の読みには若干曖昧なところがあるが、その主張の趣旨は、「一般に訓まれているところの、仁と為す、に比し余程、実践重視の意図が表われているわけである」（松川 2000: 151）というにある。この趣旨自体には賛意を表したい。

問題は、松川の論証のテクニカルな側面にある。甘節の記録は「仁と為す」と読む方向での解釈であり、呂熹の記録は「仁を為す」と読む方向での解釈であった。両者は相反する見解であると考えられる。その要因は、時期的な違いによる朱熹の見解の揺れかもしれないし、記録者の資質が影響しているのかもしれない。ともかく、両者が違う方向性を示しているとすれば、無理に総合できる性質のものではない。しかるに、両者を総合してしまったことにより、「仁と為す」と「仁を為す」とを足して2で割ったような「仁と為る」という解釈が導き出されているように見受けられる。実践重視という観点からいえば、本稿が採ったように呂熹の記録に優越的地位を与えることにより、「仁を為す」という解釈の側に朱熹の真意を見出すことができるはずであった。

「仁と為る」という読みは、管見の限り松川以外に誰も与えていない。それは画期的な創見ともなりうるし、朱熹がこの解釈で述べている思想構造のなにかは言い当てているものともいえる。しかし、こうした創見にはそれなりのリスクも伴う。私の検討作業は、既存の訓読の枠に引きずられすぎているかもしれないが、その枠内ですでに正当な解釈が見出されいながら埋没している現状があるとすれば、その正当性に改めて脚光を当てるのはそれなりの意義があるものと考えられる。

おわりに

まとめよう。『論語』顔淵篇第1章の「克己復礼為仁」は、朱熹『論語集注』の解釈に従う限り、「己に克ち礼に復りて仁を為す」と訓読する方向での解釈が正当である。この結論を、近代以降の日本における諸解釈の比較検討を手がかりとして得た。この考察を開始した動機は、『集注』の解釈に従うはずの諸業績において必ずしも

定解が得られておらず、経文と注文との読みすらも一致しない事例が多くを占める現状に疑問を抱いたことにある。第1節でこの現状を確認した。第2節では『集注』そのものの分析を通じて、朱熹の解釈は、木南卓一ならびにその源流にある山崎闇斎学派の見解どおり、「仁を為す」の方向にあることを確認した。以下の各節では、この主張の反証と目されるものを検討し、その有効性を否定する議論を行った。すなわち、第3節と第4節では、少なくとも経文について「仁と為す」と読むことを支持しそうな資料について、その有効性を疑問視した。第3節では『朱子語類』における朱熹自身の発言、第4節では黄震『黄氏日抄』での議論である。さらに第5節では、松川健二により提起された「仁と為る」という読みを検討し、成り立ちがたいと結論した。

本稿の議論は、主として日本の、とりわけ漢文訓読による解釈を中心に取り上げた。そのことから来る制約が限界となり得るが、問題自体としてはある程度中国での解釈状況にも共通する。つまり、後世の中国の朱子学者にとっても、「克己復礼為仁」を朱熹の意図したとおりに「仁を為す」の方向で解釈することは、必ずしも容易ではなかった。黄震の議論の存在や、それを含む汪份増訂『四書大全』の附注状況は、このことを示唆する。何よりも、『集注』本文に定着される以前の朱熹自身の思考においても振れ幅のある問題であった可能性が高い。『集注』の論理をその注釈構成に照らして確定した本稿の考察は、訓読を主体としようと中国語による解釈であろうとも、共通の有効性を持ちうると考える。

さて、残された課題を展望しておきたい。

第1に、近代以降の日本の解釈状況を本稿の出発点としたが、そこで主流を占めていた経文を「仁と為す」、注文を「仁を為す」と読む解釈については、本文に示唆したとおり一定の慣習的な力の作用が想像できる。そのことを検証するには、江戸期の訓点の状況において現在の読み方がどこまで遡れるかを確かめ、そこに変化があるとすればどのような要因があるかを推測することが必要であろう。

第2に、この部分について本文と注との読みが違ふのは、かなり根本的な問題であるのに、なぜ多くの解釈者が問題を感じなかったのか、という疑問である。このことの少なくとも一因としては、「仁を為す」ことと「仁と為す」こととの違いが消失する地点を、

朱子学の思想構造が必然的に予想しているからではないか、と論じることができそうである。「仁と為る」という読みを提起した松川健二や、経文も注文も「仁と為す」で疎通させようとした中村惕斎の議論は、誤りではあるにしても示唆的なポイントを含む。第1節に引用した後者の説明を想起しよう（文献注についてはそちらを見よ）。「これ即仁になりたる時なるによりて、仁とすと云なり」とあったのは、己に克ち礼に復るという実践が遂げられたその時点を目して言っている。その時点に即していうなら、「克己復礼」がそのまま仁であるので、読みとしても「仁とす」となる。引用の最後に「本文の正意は、たゞすでに克己復礼して、仁になりたる者を云なり」とあるのも同じことである。ところが、興味深いことに、中村の説明の冒頭には「仁をする者」とあった。つまり、『集注』の表現が「仁を為す」実践者を指して言っていることを、同時に認めているのである。

すなわち、「仁を為す」実践は、未知の地平を開拓するのではなく、本来的な状態に回帰する。到達した時点に視点を据えれば、それはもはや仁なる状態であり、克己復礼の完成である。言い換えれば、仁を為すことと仁であること（仁と為すこと）とは一致する。松川の「仁と為る」の読みも、この時点を目して言うなら成り立ちうることとなる。そうすると、「仁と為す」と「仁を為す」との違い自体、意外にどうでもいい問題であったということだろうか。だとすれば、「である」ことと「する」こととの峻別を前提とする近代的価値観¹¹に対して、むしろその一致にこそ価値を置いて追求する思想構造の意義もしくは可能性へと、話の風呂敷は広げられるかもしれない。

そうは言っても、以上のことは『集注』から忠実に読み取れる範囲を越えている。『集注』はあくまでも、「克己復礼」という実践を「心に具わる徳の全体を実現する手だて」（土田訳注 2014b: 297-8）つまりは仁の実現の手だてとして位置づけているのであって、それは未だ全体が実現されていない時点に定位した上での、仁の追求であり実践なのである。

[注]

- 1 いわゆる『四書集注』の1つ、以下『集注』と称す。「注」字は「註」と記されることも多いが、本稿では原則として「注」字を用いる。原拠資料を反映して「註」字を用いるときには一々「ママ」等を注記しない。
- 2 こうした問題に焦点を当てた研究として、佐野公治（1971）、溝口雄三（1980: 283-315）、松川健二（2000: 147-64）などがある。
- 3 私自身は古典中国語理解の方法として訓読には限界があると考えているが、解釈の大枠を簡潔に提示できる利点は認められる。過去の日本においてこの方式が果たした役割の大きさから、本論文の主たる検討対象もまた漢文訓読による解釈が主体であるので、本論文としても訓読により解釈のパターンを提示することとする。
- 4 経文「を」+集注「と」のパターンは、実例も存在しないし意味をなさない。
- 5 李申による『集注』の現代中国語訳を通じて同様の結論を得る。「為仁、即用來使心的徳行完整（「為仁」とは、それによって心の徳を完全にさせること）」（李訳注2002: 259、日本語訳林）とは、明らかにそのような行為・実践を指している。
- 6 ただし、(15)の中村惕斎の解釈には、(5)の松川健二にも通じる思想解釈上のポイントが含まれていると思われる。その点は、「おわりに」で今後の課題として示唆する。
- 7 ただし、その読解に濃厚に浸透している闇齋学派の思想に私が賛同するというわけではない。
- 8 未詳。『論語』衛霊公篇で子貢が「為仁」を問うた話の誤記か。
- 9 同じ章の『集注』で「己」字については前後で解釈が変わってしまっており、そのことが多くの批判を浴びたが、この場合、後出の「為仁由己」の「己」は明らかに「自分」という一般的意味であり、それゆえか注も附せられていない。逆に言えば、注とは説明を要するまさにその場所に附せられるのが原則だということが再確認できる。
- 10 近代の簡朝亮の場合、『集注』の当該注文までを「仁と為す」という解釈のもとに理解し、波線部での「為仁」は「仁を為す」こととして、第3段の「為仁由己」を先取りした形で仁の実践を問題にしたのだと解説する。前半の解釈の無理はすでに触れたし、それを波線部と分断するのは『集注』の論理を破壊するものというべきである（簡[20C初]2013: 700-1）。
- 11 それに立脚した議論の代表が、丸山真男に見られよう（丸山1961: 153-80）。

[文献]

- 【日本語】（著者名五十音順。和刻本漢籍は便宜上こちらに含めた）
- 宇野哲人訳，1920、『四書集注』世界聖典全集刊行会。
宇野哲人，[1929]1980、『論語新釈』講談社。
汪份増訂・吉村晋点，[1853跋]1993、『和刻本四書大全』中文出版社。
小澤正明，[1988]1989、『朱熹集註論語全訳』，2版，白帝社。
木南卓一，2001、『論語集註私新抄』明徳出版社。
倉石武四郎訳，1970，「論語」吉川幸次郎・福永光司編『世界文学全集3 五経・論語集』筑摩書房，433-529。
小島毅，1994，「『朱子語類』顔淵問仁章訳注稿（1）」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』2：1-22，（2016年9月12日取得，徳島大学機関リポジトリ）。
佐藤鍊太郎監訳，2013，「『朱子語類』卷四十一・論語二十三 顔淵篇上・「顔淵問仁」章（二）訳註」『中国哲学』（40）：143-258。
佐野公治，1971，「宋以降の思想史的展望へのノート——論語顔淵篇首章の解釈史

を手がかりとして』『思想の研究』(5)：45-64.

鈴木由次郎ほか, 1974, 『朱子学大系第7巻 四書集注(上)』明徳出版社.

田中謙二, 2001, 「朱門弟子師事年攷」同『田中謙二著作集 第3巻』汲古書院, 3-297.

土田健次郎訳注, 2013, 『論語集注1』平凡社.

———訳注, 2014a, 『論語集注2』平凡社.

———訳注, 2014b, 『論語集注3』平凡社.

———訳注, 2015, 『論語集注4』平凡社.

中村惕斎, [1701叙]1910, 「論語示蒙句解」『先哲遺著 漢籍国字解全書 第1巻』早稲田大学出版部, 全391頁.

日本古典学会編, 1978, 『新編 山崎闇斎全集 第1巻』ペリかん社.

吹野安・石本道明, 2001, 『孔子全書第6巻 論語(6)』明徳出版社.

松川健二, 2000, 『宋明の論語』汲古書院.

丸山真男, 1961, 『日本の思想』岩波書店.

溝口雄三, 1980, 『中国前近代思想の屈折と展開』東京大学出版会.

矢野恒太編, 1907, 『ポケット論語』博文館(2016年11月11日閲覧, 国立国会図書館デジタルコレクション<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/754239>).

吉田公平, 2000, 『論語』たちばな出版.

【中国語】(著者名ピンイン順)

黄震, [1768刊]1984, 『黄氏日抄 附古今紀要』台北, 大化書局.

簡朝亮, [20C初]2013, 『論語集注補正述疏: 附《読書堂答問》』上海, 華東師範大学出版社.

李道伝編, [1215]2016, 『朱子語録』上海, 上海古籍出版社.

李申訳注, 2002, 『四書集注全訳』成都, 巴蜀書社.

黎靖徳編, [1270]1986, 『朱子語類』北京, 中華書局.

朱熹, [12C末]1983, 『四書章句集注』北京, 中華書局.

[付記] 本論文はJSPS科研費|P16K02160(研究代表者: 恩田裕正)の助成による研究成果の一部である.